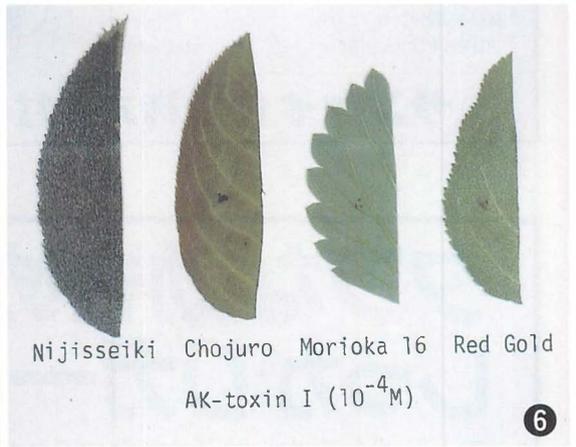
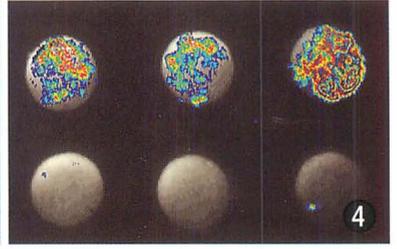
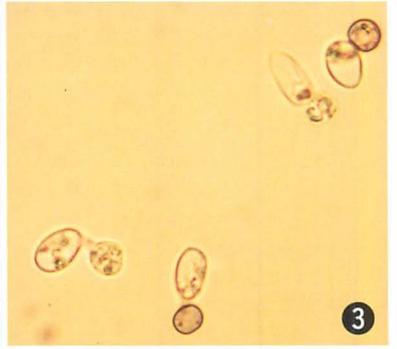
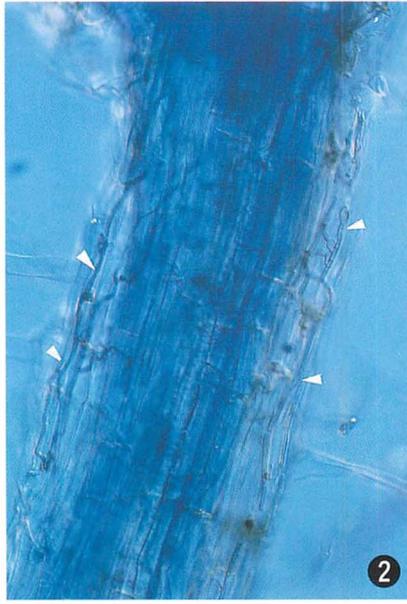


# 植物感染生理の新展開



- ① 綿葉枯ウイルス外被タンパク質発現形質転換イネの抵抗性発現 (河又 仁氏原図、本文 4 ページ参照)
- ② ハクサイ根の皮層細胞内に定着している *Heteroconium chaetospora* の菌糸(矢印)(成澤才彦氏原図、本文 5 ページ参照)
- ③ ウリ炭そ病菌の野生型付着器およびアルビノ変異株の付着器 (久保康之氏原図、本文11ページ参照)
- ④ エリシター処理したジャガイモ塊茎における活性酸素生成。ジャガイモ塊茎ディスクを疫病菌菌体壁成分エリシターで処理し、ルミノールを介した化学発光を高感度カメラを用いて観察。着色部分は活性酸素生成を表す。(川北一人氏原図、本文26ページ参照) 上：エリシター処理、下：緩衝液処理
- ⑤ ナシ黒斑病の二十世紀ナシ葉上での病斑(本文19ページ参照)
- ⑥ AK毒素によるえ死形成。宿主である二十世紀ナシ葉では毒素処理により著しいえ死を誘起。抵抗性ナシ品種の長十郎、非宿主のイチゴ(盛岡16号)およびリンゴ(レッドゴールド)葉は無反応。(児玉基一朗氏原図、本文18ページ参照)
- ⑦ CMVのRNA複製酵素を導入した形質転換タバコ(V1V2)(上)と非形質転換タバコ(BY-4)(下)におけるCMV-RNA接種1週間後の接種葉での病徴。V1V2は局部病斑が小さい。BY-4では局部病斑が大きく、黄化の広がりを示す。(鈴木 匡氏原図、本文34ページ参照)